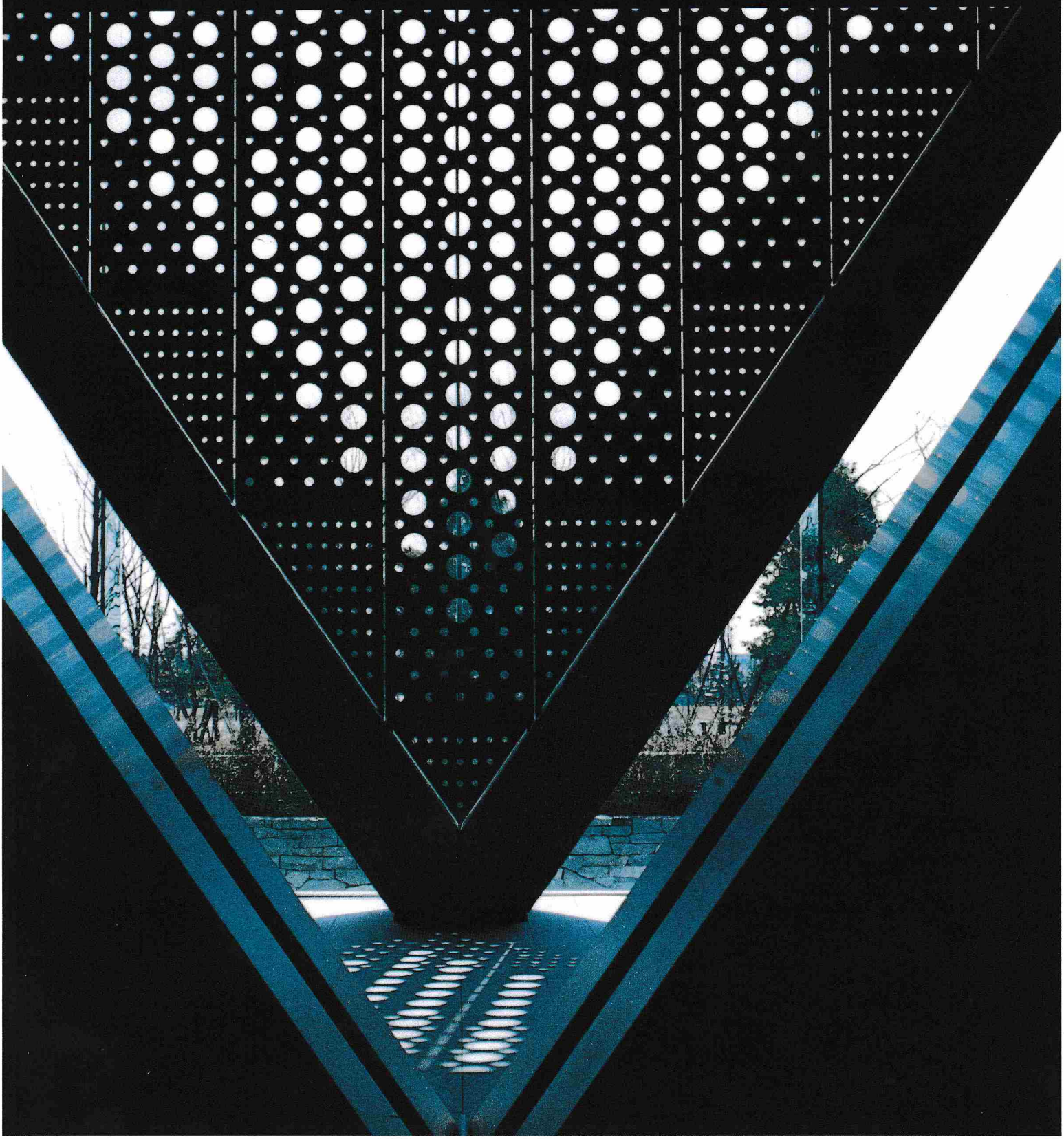
1996/9 NO.21

aaca

社団法人 日本建築美術工芸協会



CONTENTS

東京都現代美術館・・・・・・・・・・・1
世界のリゾート・シティに成長したラスベガス・・・4
時代の華一輪
松尾敏男・・・・・・・・・・・・・・・6
建畠覚造・・・・・・・・・・・・・・・7
aacaトーク
宝橋正太郎・・・・・・・・・・・・・・8
福原一郎・・・・・・・・・・・・・・・9
東京都国際フォーラム見学会に参加して・・・10
アピアランス(会員作品紹介)・・・・・12
aaca会員募集のお知らせ・・・・・・13
第8回aaca'96北九州シンポジウムのお知らせ・・・14

■表紙写真
「東京都現代美術館」
撮影新建築写真部

東京都現代美術館

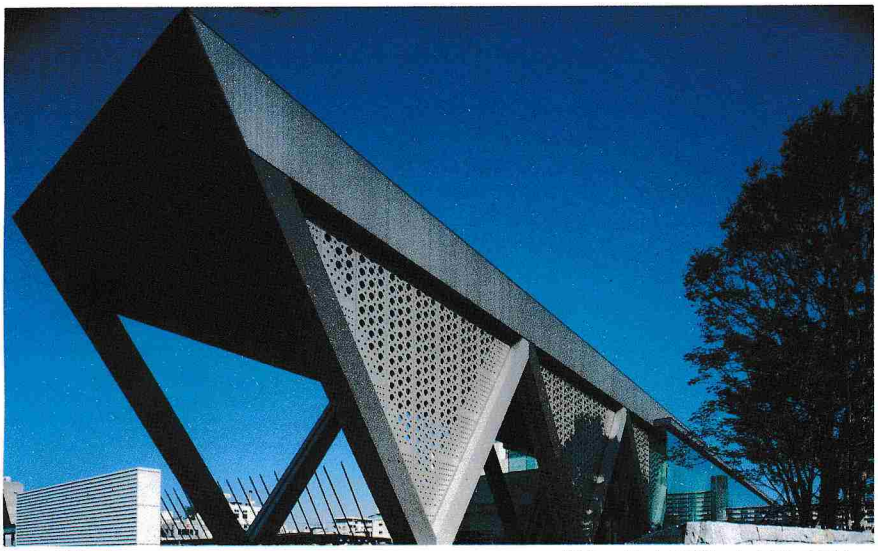
aaca理事
TAK建築・都市計画研究所
代表取締役
YANAGISAWA TAKAHIKO
柳 澤 孝 彦
東京都渋谷区神宮前3-13-12
TEL. 03-3402-4098

首都東京に現代美術の動向を知ることのできる美術館の建設を望む声に答えて、東京都現代美術館は江東区木場公園の北端にその位置を得た。24haと広大な都市公園の一角であるので、公園と一体的な環境化を計ることで、そこに一大パブリックゾーンが形成されるものとの考えを出発点とした。即ち美術館を公園との呼応関係に発展させる中に固有の空間性を際立てて、それを現代美術と向き合わせようとするものである。

大型公共施設の分散配置を進める都政の一環として位置を得た木場公園内の敷地は、およそ24,000m²で、この規模は美術館の基本機能を並列に配置することを可能にするものであったし、その上に公園内の建物高さ制限もあって、平面構成に広がりを持ち、断面ではあまねく水平的な構成が生み出された。

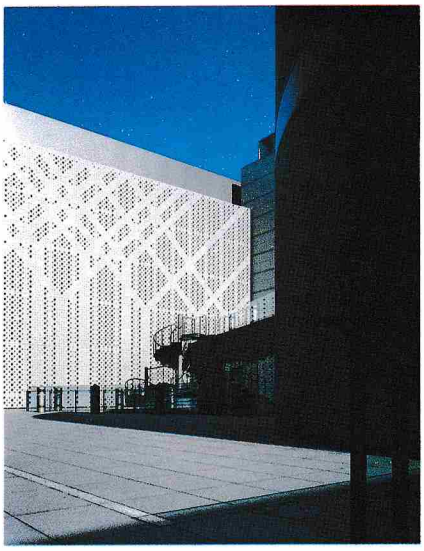
とりわけ空間規模の大きい公共施設に於いては、平面的な広がりのある構成が、利用者に対して基本的に接地性の高い水平的動線を提供し、また建築空間とこれをとりまく環境相互の関係を直接的なものとするために極めて有利であると信じている。当美術館も、この特徴を発展させたものといえよう。

美術館の配置構成は南の公園側にパブリック棟、反対の北側に管理部門棟を平列配置させ、その中間に企画展示棟、美術情報棟、常設展示棟の三つをはさみ込んだ単純明快な構成として、それらの基本的な構成ブロックを水平動線でつなぐものとした。そして建築をとりまく環境との関係をより直接的なものにするために、前面道路と公園側に向けてパブリック空間を配し、極力開放的なディザインで内外の直接的関係が充分に計れるものとした。随所に外部と開放性をもって連携する空間は、外界の変化が美術館の空間の動きと連携をもって交流するといった、空間の環境化への一計である。開放的な関係でつながる空間相互の視覚的な流通は、居合わせる人々相互の視覚を結び合わせて、時空を共有する連帯意識が引き起こ



撮影：村井　修

公園いっぱいに伸びるエントランスロビー



様々のイベントに対応した中庭

断面的な構成を交錯させる外部展示空間とロビー棟

すある種の劇場性を生み出すに違いないと考え、鑑賞者の芸術的営為そのものが即座に美の対象に化してしまうといった、いわゆる「ライブステージ」としての空間性をそこに期待した。このことは、環境や人々の日常的な行為と相互に関わる領域にまで踏み込んでいる現代美術の傾向を受け止めるにも、充分なる有効性を発揮するものとして考えられた。

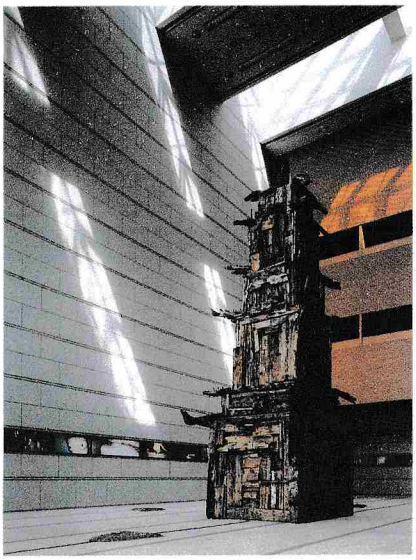
いずれも多面的に連携する空間の連鎖を、美術館の鑑賞ルートに重ね合わせた構成に意を用いた。平面構成に於ける環境化は、アトリウム空間に外光を導き込んで、内的空間に外的な環境因子を投げ入れるといった風に仕立てたが、一方断面構成に於いても、外的因子の投入にはダイナミックな構成を行っている。即ち公園側に面した部分を、地下２階まで掘り込んだ外的空間で構成して、公園を美術館の内に引き込み抱え込んで、多様な空間のネットワークを形成し、それらが相互に重層しまた作用し合う構図を意図とした。

展示室については、いわゆるホワイトキューブが構成の主体を形成しているものの、ハイサイドライトや大開口部を通じて交流する自然光や視覚の流通を因子とするアトリウム化によって閉鎖的空間を基点に、開放的な空間へ向けて発展する空間体系の中にディザインされている。企画、常設の展示室には、それぞれに大きなアトリウムをめぐる鑑賞動線が形成されているが、アトリウム空間によってそれぞれの展示の特性が一層増幅されることが期待されている。

美術館に於ける様々な作品は、その空間と引き合う緊張の中に存在しているものだが、それらは見る人々の心の変化や、光や影の変化といった「時間性」の中に開花するものだと考えている。光はそれらの主役で、作品の置かれている空間に生命を通わせる。とりわけ自然の光は、空間に時を生み、空間のシルエットを瞬間から瞬間へと切り取って行く。

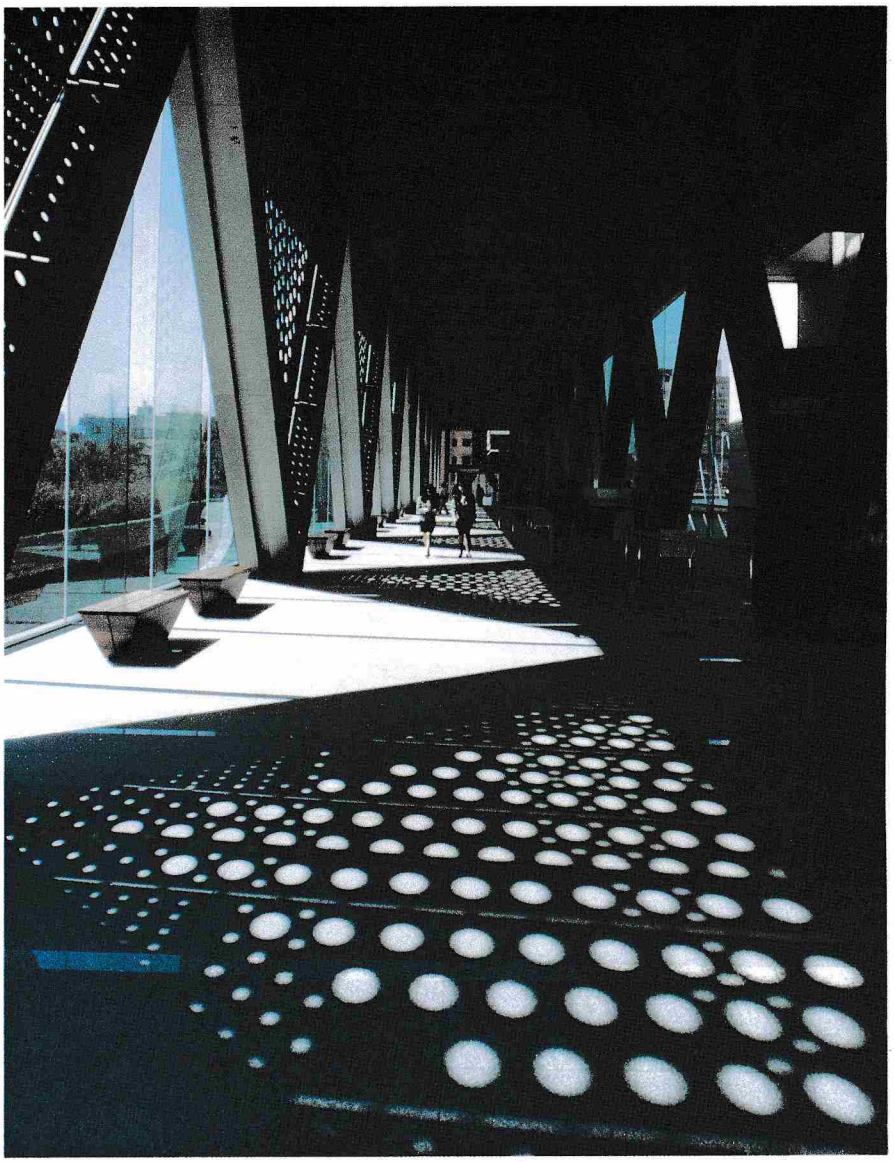
積を重ねる空間のシルエットは、人々の心を次なる新しさへと開いていくものだ。巧まざる自然の働きをいかに空間に引き込むかに意を用いる所以である。この美術館の中にはかような光と影の動きをつくり込みたいと考え続けていた。ハイサイドライトやアトリウムの開口部から入射する光と影は、実に豊かな時間の軌跡を空間に描き出してくれる。

公園の幅にほぼ一杯に伸びる全面ガラス貼りのロビー棟については、全長160Mに及ぶガラス面の全てを公園に向けた視覚的流通がディザインされている。美術館内部が公園(外)にも顕であり、一方美行館展示の背景が時には公園であるといった直接的な視覚の流通を狙いとしたが、



外部と視覚的に交流する企画展示アトリウム

常設展示アトリウム



公園にガラス面をいっぱいに向けたロビー棟・床に映すスクリーンのパターンが光と影を演出する。

したがってロビー棟は展示室と公園との間にあって、視覚的交流を増幅するオルガナイザーの役割を担うものである。

そしてまたこのロビー棟にも光と影をプロデュースしている。

公園に向けて開放的なガラス面には、サンコントロール用のアルミスクリーンを配列させて、変化を繰り返す自然の光と影を床面に映し出そうというものである。それらは160Mの長さを適度に分節しながら、光の行方に変化を重ねる。ロビー棟はまたダイアゴナルな列柱を構成して、あたかも地下１階の石と水のプロムナードに架け渡された「橋」の構えをとっている。このことによって石と水のプロムナードの空間の外部化が際立ち、公園との空間的呼応も直接的なものになると考えられた。またダイアゴナルな列柱は、ロビー棟のインテリアにある種のリズムある動きを発生させて、パブリックな空間性を活きづかせているものと思っている。ロビー棟はいわば、常設・企画・情報の各ゾーンへアクセスするアベニューであるが、時にはこの長い空間性を利用した企画展示も予測の範囲に入れたものである。

美術館にはまた、自然の力に感応して活きづくアートがつくり込まれている。その一つはロビー棟の「音」。両方の窓側の床吹出しグリルの中に、小型のスピーカーを無数に配列し、コンピューター処理した水の音がその時々の温度と湿度の組合せに感応して、時として同じもののない音をかすかに響かせ、人々の歩みに呼応させているものである。

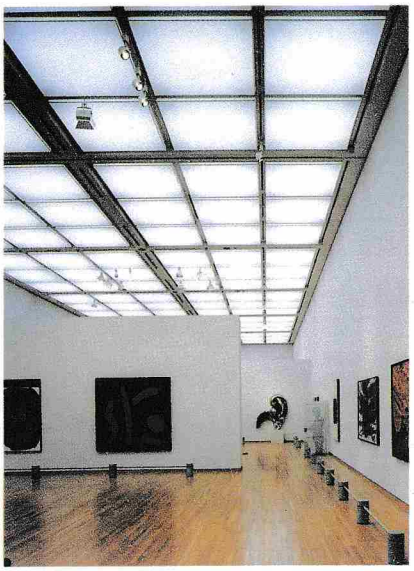
二つには、美術館閉館後のロビー棟に降ろしたスクリーンに映し出される「光」。「音」同様にカオス理論で組み立てられた光の変化が、美術館の夜の鼓動の如くに色と動きの変化を映すもので、とりわけ公園側に向けて夜の美術館を演出する。

三つには前面道路と美術館館領域を柔らかく隔てるステンレスパイプが立ち並ぶ矢来の動き。パイプはロビー棟の列柱と同じ角度の傾きをもって並び、アプローチを構成するカスケードの水中に浮いて、風をうけて変化ある動きを表わすというもの。

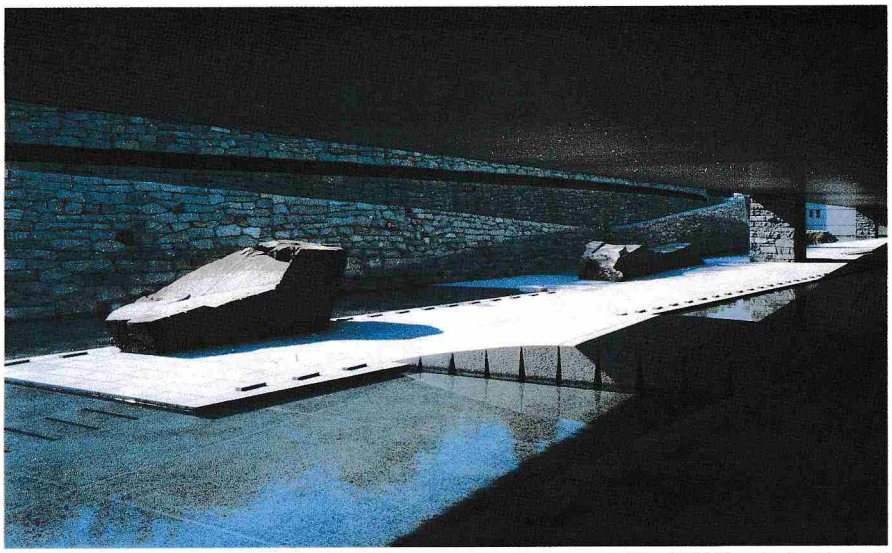
また石と水のプロムナードの自然光の反射もその一貫であるし、企画展示と常設展示のそれぞれの棟に挟まれた中庭に、光や音の思わぬ演出を潜ませている。

建築の命は竣工と同時に活きづいていくものだ。かつて江戸の時代にイメージ豊かな芸術を生み出し、ヨーロッパ文化に強い影響を与えたいわゆる川の手のこの地に、今新しい美術発信の拠点がつくられた因果を考えるにつけても、今後引きもきらず訪れる利用者やアーティスト達の手によって、東京都現代美術館が活動体としての完成を永遠に目指し続けることに絶えざる関心を寄せたい。

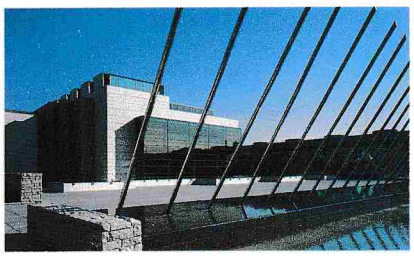
1階企画展示室・大型可動展示壁が展示のフレキシビリティーを高めている



1階常設展示室



公園を引き込むように堀り込まれたプロムナード・水と橋をモチーフに江戸の現代風がディザインされている



カスケードの水中より浮かぶ矢来

エントランスロビーと水と石のプロムナードの夜景

世界のリゾート・シティに成長したラスベガス

aaca会員
株式会社長谷川デザイン研究所
代表取締役社長
SAKAE HASEGAWA
長谷川　栄
埼玉県浦和市元町1-27-16
TEL 048-886-2402

刺激的な新名所登場・巨大グラフィック・ディスプレイ「エクスペリエンス」

77億円の巨費をかけ、210万個の4色構成バルブを250台のパソコンが100ギガバイトでフル稼働する、世界最大のグラフィック・ディスプレイ・システムが、ラスベガス・ダウンタウンのフレモントストリートに登場したというので早速取材してきた。

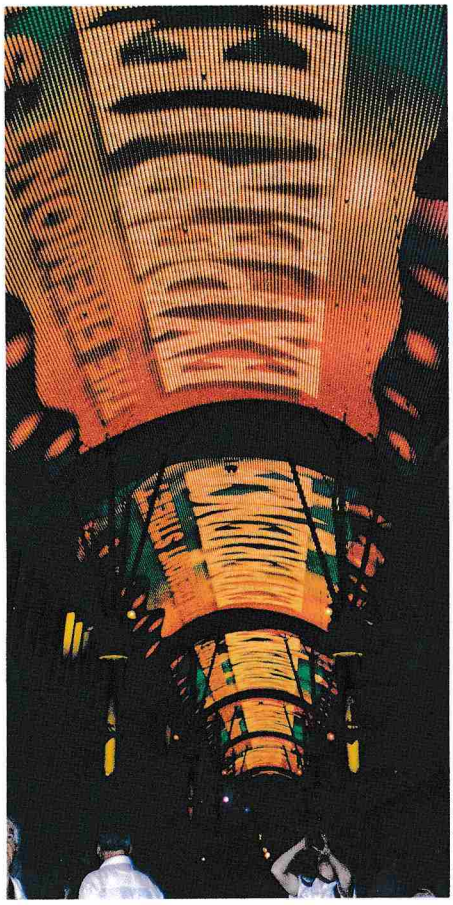
この装置は従来からある商業建築用の、ライトアップ、ネオンアート、イルミネーション、レーザー光などいう古典的手法に大きく水をあけたもので、400メートルにわたるモール全長に、シックな円形アーケードを新設し、曲面アーケード自体を210万灯の4色バルブで発光させ、ファンタジックな動画を演出した画期的なディスプレイ装置である。

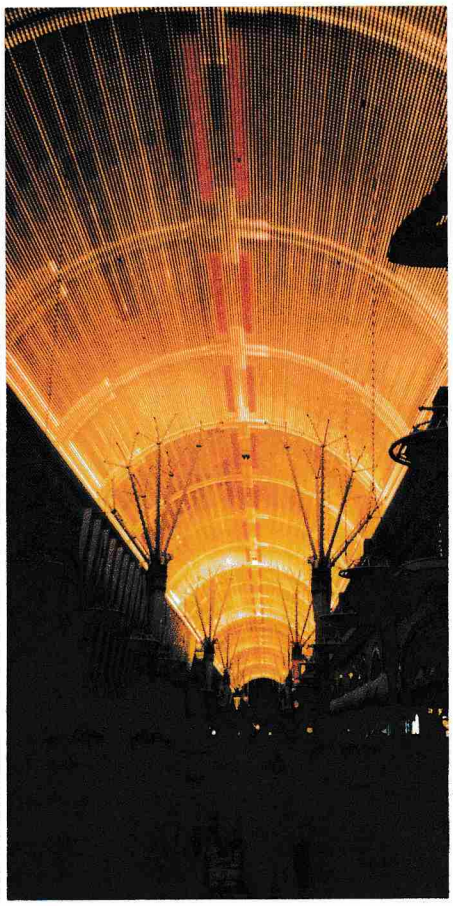
イメージ表現のスピードと、多彩な色彩表現の自由さは、いままでの光の反射によるライトアップや、固定的な描写性をもつネオンアート、緩慢なイルミネーションの点表現、画一的で機械的な直進性をもつレーザー光などと違ってイメージ表現の自由さがあり格段のエンターテイメント性を発揮するものであった。

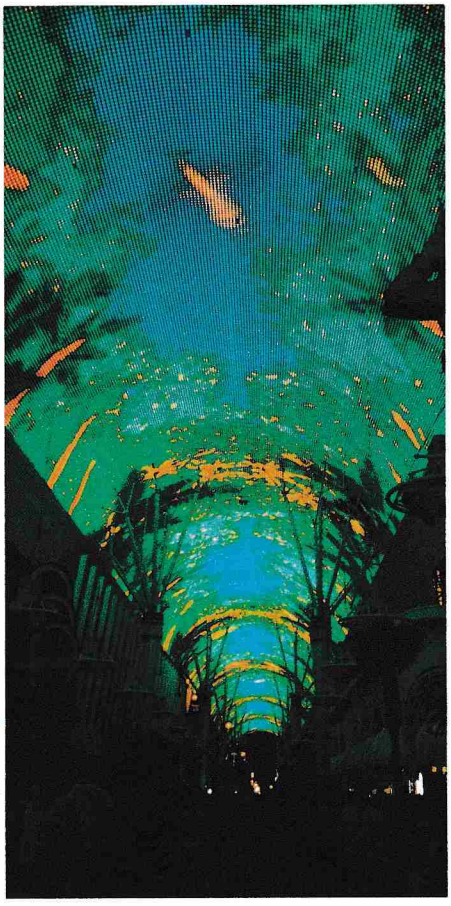
キャノピーにビルトインされたバルブの点集合により65,536色の調色が可能で、180通りのプログラムがコンピューターにより演出される。音響のほうも、208個のグッドデザインの指向性スピーカーが、540,000ワットのひろがりのある環境音を提供し、映像をいちだんと引き立てる。

このライトショーは毎夜毎定時に無料で6分間公開され、ストリートを行く市民や旅行者の眼を楽しませているが、その効果は予想を遥かに超えたもので、ラスベガスのレトロ調ネオンが輝くフレモントストリートの人気を盛り返すのに役立っている。

ネバダの砂漠の一角にラスベガスが蜃気楼のように現われていらい、この地区はネオンの洪水を売りものにしてきたものだが、近年の大型ホテルのテーマパーク化が大々的にストリップ大通りを中心に展開するのにともない、ダウンタウンのルネッサンスの秘策が練られていたものである。"砂塵のなかのカジノ・シティ"というイメージから、ラスベガスはいま1993年の新型エンターテイメント・ホテルの建設ラッシュ以来、大きく方向を変え始めた。MGMグランド、トレジャーアイランド、ルクソールに次いでいまやファミリーで娯しめる健康でアミューズメントなホテルが続々と建設を続行中で、世界でも稀にみる一大リゾート・エリアに成長している。1996年末までには、ニューヨーク・ニューヨークやエクスカリバー、モンテカルロなども完成し、宝島の実物大帆船の海戦を観せるトレジャー・アイランド、火山の大噴火を現出するミラ







ージュ、ローマの典雅な都市を構成するシーザース・パレスなど各ホテルに合流して、文字どおり世界のリゾート都市へと大発展するのである。

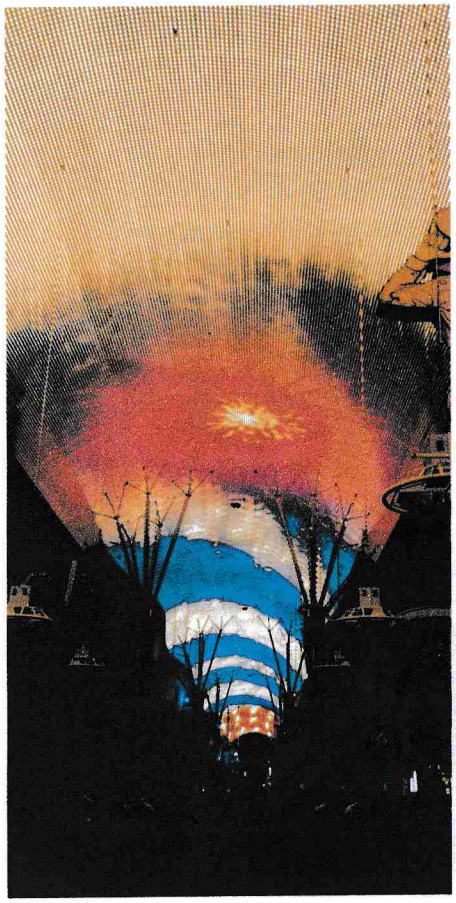
これらの都市の「アーバン・シアター化」には、アメリカ開拓時代いらいのダイナミズムを背景にしたミューゼオロジィ(美術館学)の哲学を明確にもっていることに気がつく。

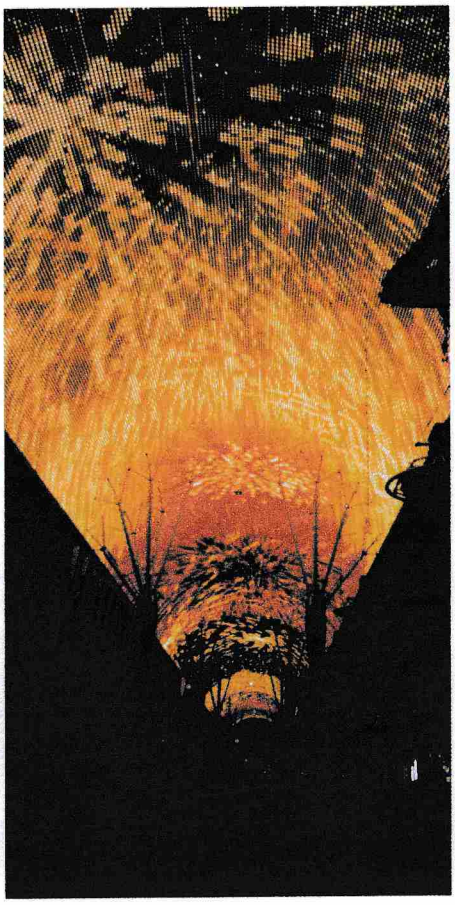
どこかの国のように、断片的な発想で大規模広告会社や展示メーカーが、商業区ごとに一時しのぎのエンターテイメントを考えるのとは大差である。ミューゼオロジィの手法はいまや砂漠から都市まで包みこんで人類のユートピアの確立に進んでいるといえる。コロラド川を宇宙的規模のフーバーダムがせきとめて人工湖と発電が始まったのは1935年、フランクリン・ルーズベルトによる業績で、南カリフォルニア、ネバダ、アリゾナの100万市民に豊かな電力を供給できるようになり、当然このようにあり余った電力の生産的利用と環境アート化の発想が、ラスベガスをライトアートのメッカにしたのである。ここには永いスパンでの国づくりの計画がしっかりと築かれていたことを知ることができる。

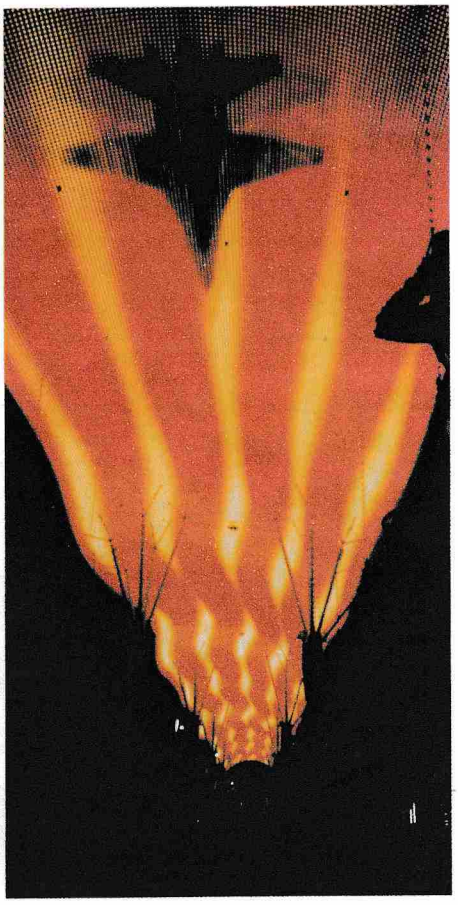
真暗な砂漠から徐々に近づいてくるラスベガスは、灯りが空をも焦がすように明るく見え始め自らそのオアシスの方向へとハンドルを切っていく。中心のフレモント・ストリートに着くと、この6分間のライトショーを見ようと数千のひとびとがつめかけ30m上方のキャノピーのほうを向いていまやおそしと待っている。

ショーはまず2羽の怪鳥がテーマの「エクスペリエンス」のタイトルを引っ張って空を行く、ついで扉が開閉し神秘の森のなかの野鳥の群らがり、両側からの美女たちの出現、抽象的な光の乱舞、花火の炸裂、ジェット機数機の低空飛行と風と光のパターン……といった抽象表現主義ふうで判りやすく親しみやすく、そしてシックで、決して卑俗に落ちないみごとな演出のものであった。他の時間帯ではより一般的でポピュラーなモティーフが選ばれ、ウェスターンもののカルトゥーンが映像化されている。

6分間のショーの間、一瞬すべてのネオンは消えて、殆どの観客がこの映像に吸い込まれるようにしてわれを忘れ感動しているのを知ることができた。その興奮はおそらく人生の夢を果たしてくれた、このパイオニアにたいする、同じ人間としての可能性にたいしての賞賛と満足、といった感情であったろうとおもう。おもわずジーンとなって、私もハイエイトVIDEOのファインダーを感激の涙で曇らせてしまった……。







時代の華一輪

aaca会員
日本画家
日本芸術院会員　日本美術院理事
TOSIO MATSUO
松尾　敏男
神奈川横浜市青葉区あざみ野2-16-4
TEL. 045-902-6270

「巴里への想い」

1984年に初めてパリを訪れることが出来た。1926年生まれの私は映画少年だったので、既に小学生の頃1932年に制作された、ルネ・クレールの映画「巴里祭」を見ていた。子供達がすべりおりる石段の手すりや石畳、それがパリであると私は思っていた。中学生になってジュリアン・テュヴィヴィエの映画「地の果てを行く」を見た。ファーストシーン、酔った男女が夜半の町を騒ぎながら歩いていると、ある戸口から男が出てくる。踊りましょうとからむ女をさけて歩き去る男を演じたのはジャン・ギャバン、叫び声でカメラがアップすると、街の名前「サン・ヴァンサン」の札。だから私はパリのどこかにその地名があることを既に知っていたのだ。

「北ホテル」がサンマルタン運河沿いにあること、そしてその街の風情までアレクサンドル・トローネの優れたセット装置で知ったつもりであった。

「格子なき牢獄」でのコリンヌ・リュシェールの台詞、「パリの夜明けも美しいわ。遠くで店のよろい戸をあける音がして母さんがコーヒーをひく。なんでもないけどすばらしいわ」私はこれこそパリの音であると思いこんでいた。

1984年に初めてパリに来た私は、頭の中にあった街の姿を下敷きにして歩き回った。モンマルトルの階段、サン・マルタン・カフェのフーケツ。「大いなる幻影」の中にも「貧しかったのでマキシムもフーケツも知らない」という台詞があるがそのカフェでコーヒーを飲んだ。その年を皮切りに年に一度ぐらいの割でパリをたずねる機会にめぐまれ、最近は、自分の中にあるパリを現実のパリに投影させて、自分なりの街の姿を作品に来ないものかとしきりに考えている。

たまたまパリで自選による展覧会をやった事もあって、ここ二ケ月ぐらいの間にパリを三度訪れた。少しづつパリという街が自分の中で発酵しつつある様だ。

屋根に並んだ煙突が目にとまる。その辺から始めようかと思い、スケッチブックを開く。高い場所をさがして、屋根を見て歩くことが多い。何故かと思って気がついた。

屋根に突きでた煙突。カメラがゆっくりと下へおりながら街角をとらえる。

アコーディオンをひきながら歌っている男。映画「巴里の屋根の下」のファースト・シーンである。

ラストシーンではカメラは上へ上へとあがる。窓から屋根そして煙突。FIN。

映画少年だった頃のパリへの想いは、古希を迎えた今も心に強く残っている。

aaca会員
彫刻家
KAKUZOU TATEHATA
建畠　覚造
東京都豊島区巣鴨3-14-29
TEL. 03-3918-3091

具象は解りやすく抽象は難解であると云った一般化された認識はいまだに色濃く残されている様だが、最近では街に抽象彫刻が置かれることが多くなって人々も拒絶反応を示さなくなって来ている。若い人々が頻繁に海外に出かけてゆき、野外における公共彫刻の抽象作品に触れ、その体験と理解を広げている事もあり、又、情報の同時化と云うか、東京もニューヨークもロンドンもパリも茶の間の視角に即伝わる時代性もあり、公共の広場においての抽象彫刻の存在も、疑いなく受け入れられる時代になって来たのだろう。然し、そういう状況の中で環境造形に係わる場において、建築家と彫刻家との出合いは必ずしも工合よくいってはいない様である。建築家の視角の射程において、美術は建築に対する付属物としてパターン化され、その質の問題は置きざりにされている場合が多い様である。一方、彫刻家の場合は、アトリエと云う密室空間に閉じられた思考の領域に依存し、現代社会の生活空間との断絶が見られる。つまり相互に共有する空間に対する配慮が欠落しているのではないだろうか。

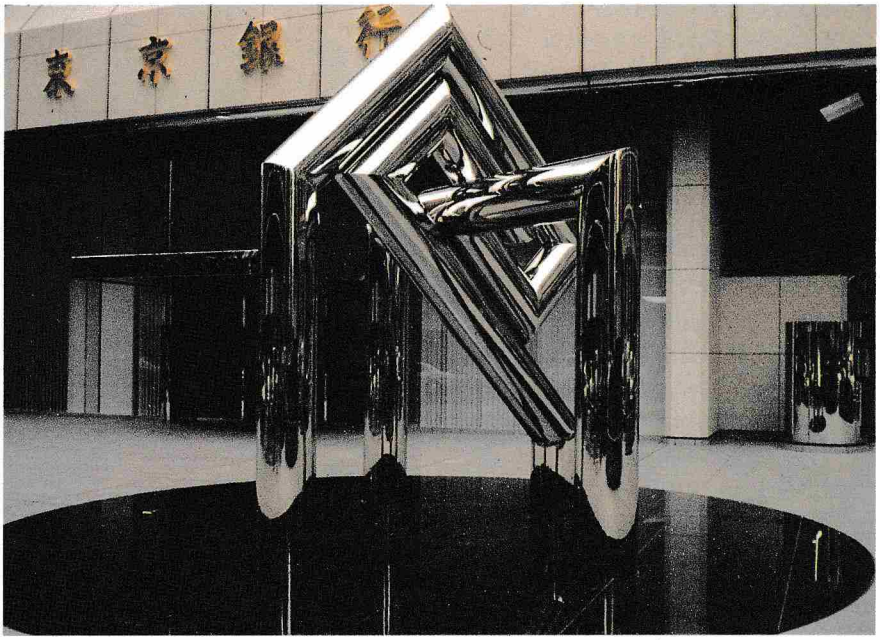
我々の生活空間における建築と彫刻の出合いを考えるとしたら、相互に共有する空間を考える事が不可欠であり、それは初期のプロジェクトにおいてなされる事が望ましい。私の場合は比較的にそういう機会に恵まれて来ている。たとえば天童駅前広場のモニュメントでは、建築家の本間利雄さんと、周りの舗道の敷石の配置から照明灯のデザインにいたるまで、双方の意見を突き合わせながら参加させて頂いた。

東京銀行本店前の作品や高崎の城跡公園のシティギャラリー前のモニュメント等も、各々三菱地所部や久米設計の担当者との可也り初期の段階から打ち合わせの機会を持つ事が出来、建築と彫刻との共有空間における彫刻の位置づけも成功したと思われる。

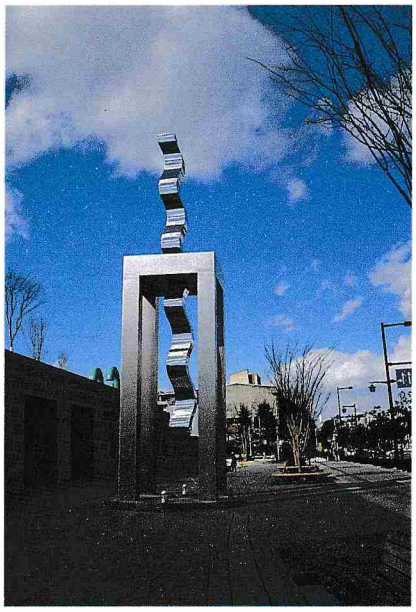
現在進行中の静岡県袋井市の駅前のモニュメントも、広場の設計者との一年余にわたる打ち合わせにより総合的な環境計画と同時進行しつつあり近く完成の予定である。

何れにしても現代彫刻の位置づけとしてスペース感覚の欠落を私は認めないと云う立場を取っている。つまり、スペース感覚とは、或る空間に係わる作品の存在する力で、もっとかいつまんで云うと、例えば或る空間に置かれた作品が、或る時ふと取り去られたとしたら、そこに補い様のない空虚感をかもし出す様な充足された存在感であると思う。其の様な作品は環境を建築と共有しながら調和すると云う事とは異った要素が求められている。私の考えでは彫刻は建築と対位する事によって空間を共有する事が出来ると思っている。

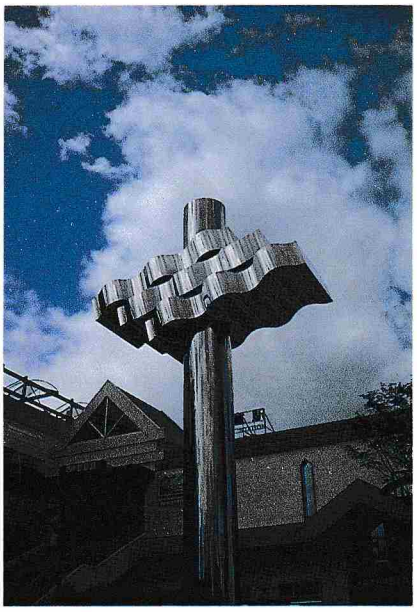
そして其の様な作品には充足された存在感のもとになる独自性と、常識を超えた不思議さを伴っているものである。当初建築と極めて調和している様に見えた彫刻が時が経つにしたがってつまらなくなり、むしろ其所に木を植えた方が良かったのではないかと思われる多くの実例を私は知っている。



東京銀行本店モニュメント(現在　東京三菱銀行 東京営業所)　"瑞　徴"
H.4000　W.3500　D.3800 ステンレススチール　1979年作



高崎市城跡公園シティギャラリー前モニュメント
" WAVING　FIGURE (光) "
H.12000　W.2800　D.2800 ステンレススチール　1993年作



天童市駅前広場モニュメント
" WAVING　FIGURE (波貌) "
H.6500　W.3000　D.1200 ステンレススチール　1992年作

aaca会員
鉄建建設株式会社 専務取締役
SHOUTARAOU MUROHASI
室橋　正太郎
東京都千代田区三崎町2-5-3
TEL.03-3221-2134

地震と建築基準法

過日aacaトークで建築基準法にまつわる話をさせていただいた。この協会員の皆様には一番縁遠いことだと思うが建築とは元来非常に社会性のあるものなので最低の基準が必要となる。それが建築基準法なのだ。他面建築は経験工学的要素の強いものなので大きな災害があると基準を改正することが少くない。

昨年の阪神大震災の時も新聞紙上に建築基準法に関した記事がよく掲載され、人々の関心事となった。この事は非常に結構な事なのだがその考え方に一般の人と我々建築を業とする者との距離が目立つ。

新潟地震や十勝沖地震の結果を踏まえ昭和48年旋行令が改正された。さらに宮城沖地震を教訓に昭和56年通称新耐震法が施工され、構造強化へ規制が強化された。この新耐震法とは国民の生命を守る最低限度の基準を決めたものに過ぎないということを認識すべきなのだ。最低限度とは圧死しない、つまり倒壊はしないということで全く無傷で残ることを想定したものではないのだが、一般の人は新耐震即ちそのまま使える建物と考えているようである。

専門家側の一層のインホームド・コンセンサスが必要である。しかしながらあの震災で改正後の構造評定や技術基準による査定を経た建物は、今までの調査によると無傷ではないが倒壊したものはないようで、旋行令改正の目的は果したことになろう。

施工令改正の際の話だが、前述のように改正の目的はもっと書物を外力に対して粘り強くしよう、即ち靭性をもたせようということだった。その際すべての建物を画一的に靭性をもたせることもないのではないか、経済的負担も大きい。地震の際防災拠点となるような建物は絶対に壊れないように、普通の建物は人命は救われる。即ち倒壊はしないように、あまり人命に関係のないような建物は今まで通りになど仕分けたらどうかとなり、建物の種類による重要度係数のようなものを設けたらどうかの話となった。

「しかし」ある委員が言った。「街に米屋があったとする。非常の際、米屋にとっては米倉庫が潰れても生活の拠点である住宅店舗の無事を願うだろう。だが街の人にと ってはは大切な食糧のある倉庫の無事を望むだろう」「なるほど、そりゃそうだ、まあ今回は見送るか」でチョン。

これはものを公的あるいは私的見地より評価することでもあるが、ものの判断を画一的に定義ずけることの危険性もまた示唆している。大げさに言えば民主主義の根源にも拘わる。まあ、そこまで間口を広げることもないけど。

ちなみに先の震災を下敷きとして基準法改正の動きは進んでいるようだ。また平成7年法律第123号として「建築物の耐震改修の促進に関する法律」が施行され、今までは法律不遡及の原則から、あえて触れなかった新耐震以前の不特定多数が使用する特定建築物にも耐震診断、耐震改修が義務づけられている。

神戸・赤石町(元町に近い所)の明海ビルです。左の新館は、ほぼ無傷、中央の旧館は、崩壊、右の住友生命神戸ビルは窓ガラスがすべて破損しました。

日本流行色協会　参与
ICHIROU FUKUHARA
福原　一郎
東京都大田区中央4-19-4
TEL.03-3778-0380

靴と流行色

今日、3月15日は、「靴の記念日」で、1870年(明治3年)千葉県佐倉藩士の西村勝三が大村益次郎の勧めによって東京築地入舟町に靴の工場を開設したのを記念したもの。

こうして日本で洋式の靴の本格的生産が始まった。

人類の祖先が直立2足歩行をするようになったのはいつごろかはっきりわからないが、約400万年前の人類最古の足跡が東アフリカ　タンザニアで発見され、この足型のレプリカを1992年竣工した近代的な大塚製靴日吉工場（大谷研究室設計）のホールにレリーフとしてレザーアートで飾られている。ここでは革を裁断して甲の縫製から底付けまで一貫した生産を行い、付属設備としてクツのミュージアムが開設されている。

はきものの歴史で最も古いものは古代エジプトのサンダルといわれる。これは足を守るというより権威の象徴として一部の限られた人たちが用いたもので、その後、ギリシャ、ローマでもサンダルが用いられた。そのほか足を包むシューズの型式も現れた。中世まではヒールが無く平らな底に台をつけたことなどからヒールが考えられたといわれる。

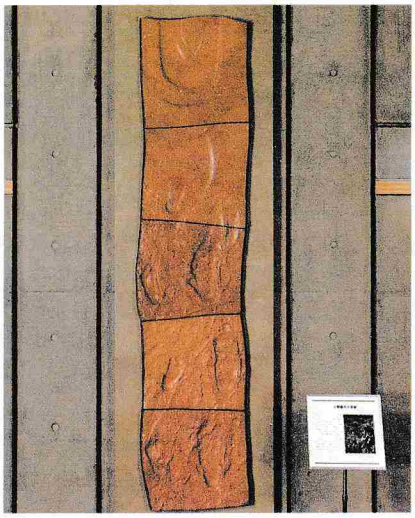
日本に洋式の靴が伝わったのは16世紀、ポルトガル人からと思われるが一般には用いられず、江戸末期に坂本龍馬(1835~1867)がはかまに靴をはいているのが有名。

明治初年、鹿鳴館時代には紳士・淑女が靴をはいてダンスを踊った。

洋服の変遷と共に洋靴も製法・デザインが移り変り、20世紀になって昭和の始めモダンガールやモダンボーイが靴におしゃれをした。第2次世界大戦中は流行は影をひそめ、軍靴の生産が中心で皮革が統制された。

戦後はアメリカの流行がとり入れられ、外国映画や、ジャズ音楽の影響からファッションが生れ、靴も「赤い靴」や「サブリナシューズ」「ヘプバーンサンダル」などが現れた。日本流行色協会は1953年に創立して、1959年(現・天皇)と1993年(皇太子)のご成婚の慶祝カラーを発表した。流行色は24ケ月前にパリに18ケ国の代表が集り国際流行色の選定が行われ、日本では1年前に業界とも関係して選定が行われ修正を加えてシーズン前に発表される。1983年JCC40というカラーコードが制定され、全国8都市で定点観測を行って流行する色の方向を決める"天気予報"のようなもの、革靴の業界では1991年、日本流行色協会が監修して65色のカラーコードをつくり商品開発や在庫管理にまで活用している。

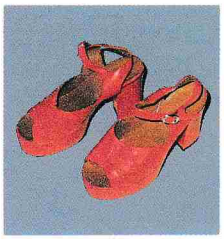
日本人が洋式の靴をはくようになってから120数年、今ではファッションの一部となり、ライフスタイルの中にとり入れられ、また、足の健康を考えた機能的な靴もつくられている。



大塚製靴　日吉工場のホールにある「人類最古の足跡」のレリーフ　猪俣伊治郎氏のレザーアート

鹿鳴館時代の婦人ブーツ

サブリナシューズ(模造品)



1970年代流行した婦人のパンタロン用サンダル

ヘプバーンサンダル(同型のもの)

大塚製靴日吉工場に併設されているクツのオーツカ　資料館

履物業界標準カラーコード
HAKIMONO　COLOR　CODE

色調＼色相		0 無彩色系(ニュートラル系)	1 レッド	2 オレンジ	3 ブラウン	4 イエロー	5 イエローグリーン	6 グリーン	7 ブルー	8 パープル	9 その他
0	ビビッド(ハイ)		10	20	30	40	50	60	70	80	ゴールド 90
1	ストロング(こい)		11		31	41		61	71		シルバー 91
2	ペール(うす)	02	12		32						ブロンズ 92
3	ライト(あさい)	03	13	23	33	43	53	63	73	83	トウメイ 93
4	ライト・トーン(明るい)	04	14	24	34	44					
5	グレイッシュ(くすむ)	05			35	45	55	65	75	85	
6	ダル(にぶい)	06	16		36	46	56	66	76	86	
7	ディープ(ふかい)		17		37		57				
8	ダーク(こい)	08	18		38		58	68	78		
9	ペリーダーク(ごく暗い)	09	19		39		59	69	79	89	その他 99

1991年制定の履物業界のカラーコード

「東京国際フォーラム」見学会に参加して

aaca会員
タペストリー
MUTSUKO SUNAHATA
砂畠　睦子
神奈川県横浜市神奈川区浦島町5-16-707
TEL.045-451-5973

aaca広報委員
株式会社 建設業信用調査協会
取締役営業部長
TOSHIO TOMITA
冨田　俊男
東京都調布市多摩川4-12-1
TEL.0424-89-2766

足場の良い有楽町の元都庁跡地に、この度東京国際フーラムがほぼ完成、オープン前の本日の見学会には驚いたことに130名集まり2時間に亘り説明を受けた。

まず街なかにこつぜんと現れた、建物という感を受けない長さ200m高さ60mの巨大な舟形のガラスの空間に入った。

光をさんさんと受ける壮大な透き通った大空間の中で、見上げると白い恐竜の骨のようなものが天井をうねり、周りの壁面は正方形の平面ガラスを銀色のメタリックで組み合わせ、凹面形状の舟をふせたような形の全面ガラス張りで、こんな建築もあるのかという想いを受けた。透明なエリアは色がなく植栽や車の赤や黄が印象的に目に飛び込み、外部との遮蔽感がなく建物の中にいることを忘れるようであった。この美しいダイナミックな空間が今後実際にどのように使われるのかが楽しみです。

さて、ガラス棟からホール棟に入るとガラスの軽快さとは一変して各ホールは木のナチュラルと銀黒の対比のむしろ和風を感じさせるものもあり、アメリカの設計者のもつ日本のイメージを感じました。

他のホールも木と、黒に近いパンチングメタルとの組み合わせ、ナチュラルとモノトーン、シンプルさが貫かれていました。

随所に取り入れた光の演出、不透明ガラスに組み入れた自然光に近い光壁、光天井、光床、またホール正面玄関のエスカレーターの両側の大階段は蹴上げがガラスでした、ちょっとシンデレラのガラスの靴を想い出してしまいました。

東京の乱開発された周りのビルが迫った都市環境のせいかそれらと対比する立地上の窮屈さをまず感じました。

もう少し広場があって少し離れて眺めることができたら、またみどり豊かな都市の中で対比があったら、もっとこの建物がはえたであろうにとかなわぬ東京の立地条件に想い至りました。

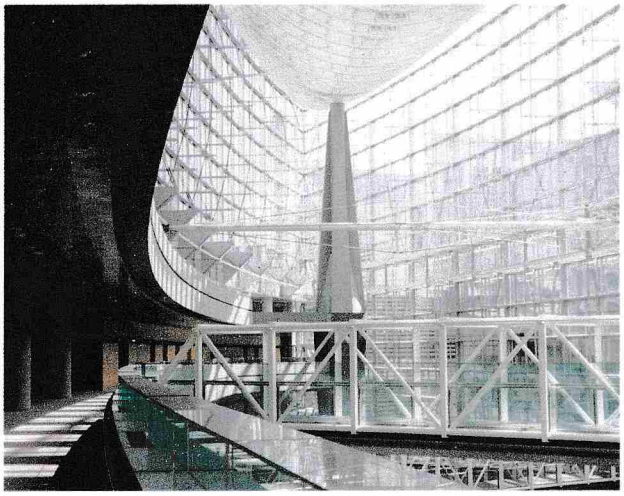
ところで、この建物がどのような組み合わせになっているのか最初に模型の説明を受け後にパンフレットを見てあらためて素晴らしい構成美がつかめました。

今度は高いところから眺めてみたいものだと思います。

1989年秋、東京国際フォーラム設計コンペ（選考委員会、会長丹下健三氏）が行われ、内外のゼネコン、設計事務所から395点が集まった。優勝したのは、ニューヨークに事務所をもつ(株)ラファエルヴィニオリ建築士事務所である(当時は別社名)。選考のポイントとなったのは都市計画的に見て、旧都庁跡地は有楽町駅から東京駅にかけてゆるやかなカーブがあり、地下鉄有楽町駅と京葉線東京駅間に建築するので凸レンズの様なガラスホールやその他のホール棟が敷地の条件を生かしながら総体的にバランス良く収まり、全体のコンセプトとしてプラザ部分を大きくパブリソクスペースをいかに取り入れたかと云うことのようだ。

見学会は6月19日、梅雨時にも拘らず晴れたムシ暑い午後2時から4時すぎまで約100名がaacaの芦原義信会長を筆頭に行われた。見学会の前に来日中のラファエルヴィニオリ氏の挨拶のあと、予想を上回る参加者となったため2グループに分けての見学となった。我々の案内役を務めて下さったのはプロジェクトマネージャーの今川敦子さん。先ず50分の1の模型を前にガラス棟、ホールA～Dの説明を受けた後、各自レシーバーと靴カバーを受けとり完成間近の工事現場へと向った。総工費1,650億円をかけた建物は如何なる姿で迎えてくれるのかと期待で胸をふくらませ最初にガラスホールに北側から入場した。全長約210m、全幅約30m、高さ約65m（B1Fより）空間容積約25万m³、壁面ガラス8+8mm（合せガラス）使用。入ってすぐの処で目につくのが1人の武士の立像、朝倉文夫作なる開都500年記念の太田道灌像が皇居の方を見つめる様に立っている。125mスパンでたった2本の柱だけで2,500トンもの鉄骨を支えている。この様な巨大な吹抜けの空間に小生は今まで入った記憶がない。まるで自分自身がかなり深い船底から見上げているような感を強くするも、皇居側はがラスを通してホール棟、ケヤキの植木など見え、燦々と光が降りそそぎ、全く圧迫感はなく内と外がつながっている雰囲気がしてきた。このガラスホールを"空中に浮かぶ巨大な船"という人もいるそうでスンナリと納得させられた。総ガラス張のため、参加者から地震対策や雨水の処理など質問が寄せられたが今川さんの話では阪神淡路大地震や関東大震災でも大丈夫との自信のある答えが返ってきた。

この後ホールAから順にDまで完成直前で職人や作業員が最終チエックで忙しく働いている中を汗だくになりながら、楽しく見学させて頂いたことに感謝いたします。7月1日に引渡しが行われ、建物の点検調整、職員の教育訓練の後、財団法人東京国際交流財団（理事長檜垣正巳氏)の運営で平成9年1月10日オープン予定。今後20年、30年後の子供達がこの建物に入りどんな想いを抱くだろうかと思い会場を後にした。



aaca会員
金属造形作家
HITOSHI FUJITA
藤田　仁
埼玉県朝霞市溝沼7-14-15
TEL.048-466-3578

aaca会員
株式会社　ワイディー　代表取締役
MAKOTO YAMAMOTO
山本　誠
埼玉県新座市栄3-7-7
TEL.048-478-3996

梅雨の晴れ間に、旧東京都庁舎跡地に新たに建設されました東京国際フォーラムをaaca会員の皆様と見学させていただき、金属造型（モニュメント）の仕事をしている私は、あらためて建築にも大きな夢と底抜けに楽しい創造の世界を感じました。

3～4年前より解体工事が開始された工事塀の中で生まれる施設に興味深く有楽町を通る度に眺めていますが、ある日気がついてみると壮大なガラスの塊と大小のキューブ4個で構成された建築物が出現していました。

アルゼンチン出身でニューヨークを根拠地に活躍しているラファエル・ヴィニオリ氏がコンペを経ての設計監理と伺っていますが、旧都庁より移植した楓のスペースを中心にホール棟とガラス棟と称する大胆な二つの塊の建築構想は、夢のある素敵な造型であり公共施設だから実現可能な設計と受け止めました。

東京国際フォーラムの印象は、意表をついた大胆で美しいデザインで、周囲との調和と存在感を持ち、建物はホール棟の「静」、ガラス棟の「動」を感じ二つ合わせると温和な個性を持ち、開館した時には大勢の人々が行き来し賑うことにより、生命を吹き込まれ楽しい空間を創造できると思います。

二つの棟のうちガラス棟に興味を持ちワクワクする気持で館内に入りました。飛行機の主翼を輸切りにして立てたような総ガラス張りの空間は、風切り音が聞こえそうな大きな変形した温室で、柱は未来に飛び立つロケットが2基、天井は超大な恐竜の背骨を再現したような梁、蟻巣のように縦積に往来できるスロープとブリッジ、さまざまな形で構成された空間は、科学博物館を想像しました。勿論、最先端技術に裏付けされた最小限の部材で構築されたガラス棟は、ジャンボジェット機の設計と共通する感触を受けました。唯一気になりましたことは、平面的なガラス、金属、石材を主に無彩色で構成してありますが、もう少し人の肌に優しい曲面、素材の質感、色彩を欲しいと感じましたが、久々に自分が小人になり蟻の巣を冒険したような気持ちになり無邪気に楽しめました。

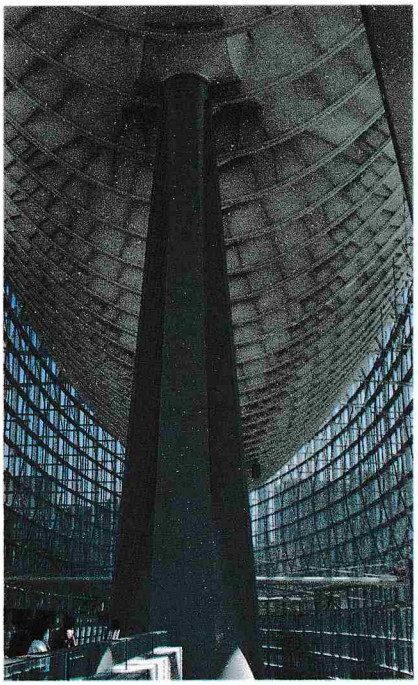
オープンした折りには、再度東京国際フォーラムを訪れ楽しい空間を享受し、また何か企画してホール等を利用したく思います。

日本で初めての本格的な国際コンペとして話題となった東京国際フォーラムの竣工が近づいた。コンペ以来はや7年近くが経過し、その間のバブル経済からその崩壊へとの日本経済の激動を誰が予想しえたであろうか。まだ全貌の見えてこない臨海副都心をふと思いながらラファエル・ヴィニオリ建築士事務所の今井さんの案内に従った。

JRの高架下を抜け東京駅側からアプローチする。JR側のガラス棟と皇居側のホール横の間に200m強の長いプラザが有楽町側へと続いている。このプラザは両棟間を結ぶとともに有楽町駅・東京駅間や周辺への歩行者の流れに対して重要で親しみやすいオープンスペースを提供している。このプラザにアンソニー・カロ、リチャード・ロング、安田侃による造形が設置されている。このアートワークの選定は都の訪問機関である選定委員会（小池一子委員長）による検討の結果アートディレクター方式が採用されたとのことである。プロポーザルによる10名の企画案の中からアートコレクション担当として篠田達美氏に決定した。（建築担当はラファエル・ヴィニオリ）篠田氏のコレクション・コンセプトによると「アートワークは機能と目的をもった施設の建築空間と調和するものである」ことを前提とし、国際性、現代性、永続性、一貫性の４点を収集の基本的考え方としている。全体のテーマを「多様性の舟」（ガラスホールのイメージ）とし、東京の多様な文化現象とこれからの世界の文化的な多様性を受け入れる器として位置づけ、作品間の対話から人々との対話、建築空間との調和から想像力と感受性に満ちた空間の創造につながるような作品の選定を意図しているようだ。まだ建物内の作品は設置されていないが、9月には国内外の著名な作家50名（日本18、アメリカ16、イギリス7、フランス3、韓国、ドイツ、イタリア各2）による134点（このうち製作依頼は10点ほど）の作品が設置される予定である。当初はアートワーク予算を総工費1,650億の1％を目標としたようだが最終的には5億8,500万に切り詰められたとのことである。これもバブルの崩壊による後遺症であろうか。

プラザからガラスホールに入ると地下から高さ60m、長さ208mのガラスによる吹抜けの大空間が広がる。このホールの入口に旧都庁舎にあった太田道灌像が皇居に向って立っている。今後展開される現代美術のコレクションの中でこの像は案外都の歴史を感じさせ、利用者をほっとさせるのではないだろうか。また、岡本太郎のあの壁画があったならさらに豊かな気持ちにさせてくれるのではないかと思ったのである。

建築空間は明快なプランと大胆な構造によるダイナミックな空間であるが、中を歩いてみると実際の印象はいたって優しい。全体に奇を衒ったところが無く、素材、色彩、デザインが適度に抑制され心地よい空間を味わうことができる。これから設置されるアートもすんなりとこの建築空間に溶け込むのではなかろうか。多様な作品による対話の可能性と想像力と感受性に満ちた空間の創造が実現することを楽しみにしたい。ともあれ来年1月のオープンから多くの人々に利用され親しまれることこそがこの施設を育て、首都東京に相応しい総合文化施設として認められることになるのだろうと思いながら東京国際フォーラムを後にした。

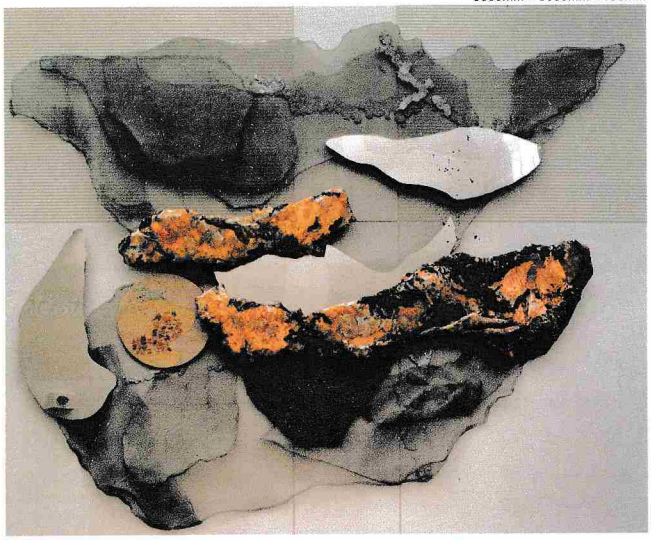


アピアランス会員作品紹介

タペストリー　造形家
KIYOMI NAKAMURA
中村清美
東京都板橋区赤塚新町3-25-16
TEL 03-3939-6530

表現手段としての夕ペストリーの素材、素材は表現の発想と無関係ではない。作品は素材によって表現されるのではなく、発想された作品にそのが必要とされたものである。異なる素材が共鳴しあい新しい表現になる。

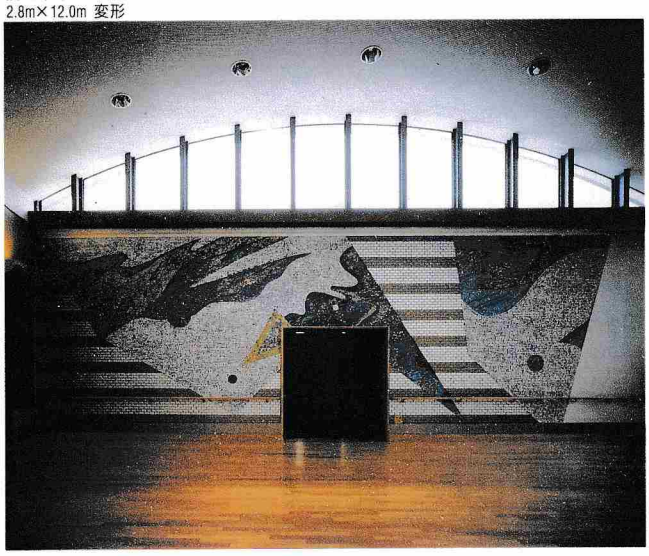
「天と地」
設置場所:
応用地質名古屋支社
3000mm×3000mm×150mm



壁画作家
CHIKAKO TOMOYAMA
友山智香子
東京都豊島区下石神井 4-34-21-101
TEL 03-3904-2822

老人や障害者と共に、一般町民が気軽に利用できる、この体育館は、大変明るく人間と建築空間が融合した語らいの場となっています。そんな雰囲気を壊すことなく自己主張しつつ、楽しく寛げる壁画としました。

「町営本宮町体育館・ラウンジ『飛翔』」
設置場所:
福島県本宮町 福祉の森地区内
2.8m×12.0m 変形



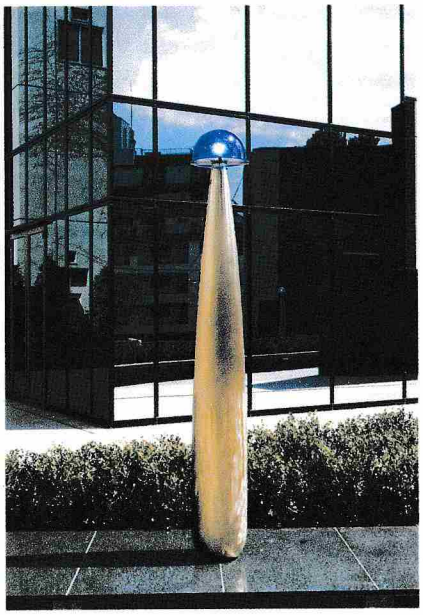
㈱アトリエ ゼロ　代表取締役　彫刻家
TETSUSHI NAGASAKI
長崎哲士
東京都大田区田園調布本町34-7
TEL 03-3722-8391

雄大な阿蘇山の傾斜地に同研修センターのモニュメントとして設置しました。大地の深底より創造のマグマが大地に向かって大きく『動き』『響く』『様』をテーマとした造形の表現とした。

「創造の鼓動」
設置場所:
熊本県阿蘇郡長陽村
東京海上阿蘇研修センター
2100mm×800mm×300mm

デザイナー
KIYOSHI NAGAHARA
永原　浄
東京都板橋区成増2-36-36
TEL 03-3365-0192

ドライでかさかさになって来た都市、ことに新宿の界隈に湿り気のある柔らかい空気を感じる空間を創り出したかった。屋外環境では耐久性や耐候性を考慮した構成に材質からしみでる優雅さを造形して見た。



「シャンピニヨン」
設置場所:
新宿マインズタワー外構
2000mm×260mm

aaca会員募集のお知らせ

豊かな美術的環境の創造を目指す団体です。
建築・美術・工芸等の分野の方々による交流・協力を……。

会員活動

■都市景観シンポジウム(京都、長野、水戸、静岡で開催)
■記念講演、シンポジウム
■交流の集い
■研修見学会
■aacaトーク　45回を数える講演者を囲んだパーティー形式のトーク。
■会報の発行　多彩な内容で毎回数多くの参加者を集め、会員相互のコミュニケーションを活溌に図っている。

理念

(社)日本建築美術工芸協会は、建築家、美術家、工芸家その他の人びととの連携と協力により、豊かな芸術的環境の創造と保存を図り、これを通じて日本文化の向上、発展に寄与することを理念としています。

文化活動

■aaca賞
優れた芸術的環境づくりを表彰しています。
■ストリートアート・デザインコンテスト　街中の公共空間の環境づくりに貢献する優れたストリートアートデザインを公募、表彰。
■aaca作品写真展
■各種展覧会(ヨーロッパ町並展等)
■「都市景観デザインへの提言」建築業界誌に「都市景観デザインへの提言」を連載し、わが国の芸術的環境の創造と保存を提案しつづけています。
■地域サービス活動　文化は地域の気候風土、風俗、習慣、歴史伝統などに育まれることを理解して、新しい地域文化の形成をめざした地域サービス活動と取り組んでいます。

沿革

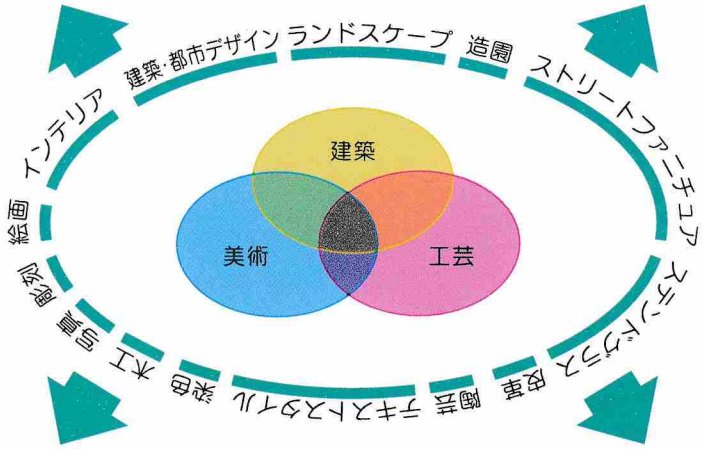
1968年、「新しい建築のなかに美術・工芸・造園などの造形作品をとり入れ、人間性豊かな環境づくり」のために、建築、美術工芸に関する方々相互の交流をめざして、任意団体「建築美術工業協会」を設立。講演会、展覧会、見学会の開催、会報の発行などの活動を続けてきました。1988年4月21日、より幅広い方々との交流を深めると共に、より一層の飛躍をめざして改組、日本建築美術工芸協会を設立しました。そして同年11月28日に文化庁所管の社団法人としての設立許可を得、以来芸術的環境の創造を目指し、以前にも増して活溌な活動を続けています。

情報・広報活動

国内はもとより、広く海外との交流を図り、建築・美術・工芸などにかかわる情報を収集、分析しています。また、会員である建築家・美術家・工芸家の方々の作品、業績、経歴などをライブラリー化し、一般のみなさまに広く活用していただける体制づくりを整えています。

保存・調査活動

日本の各地には世界に誇るべき豊かな環境があります。しかし、激しい開発の波に洗われ、崩れ去ろうとしています。日本の優れた芸術的環境を次代に伝えるために、「文化のための1%システム法」の制定運動をはじめ、さまざまな保存活動を進めています。また、調査面においても同法制定に関しての実態追跡調査、歴史的環境・建造物の保存および再生のための調査研究、パブリックアートに関する研究などを地道ながらも着実に続けています。



第8回aaca'96 北九州シンポジウムのお知らせ

私共、社団法人日本建築美術工芸協会は建築家、画家、彫刻家、工芸家、グラフィックデザイナー、写真家など芸術家が集まり各々の立場から協力しあい私達の環境を芸術性豊な場とすることを念願してシンポジウムをはじめ各種事業を行っております。

今年度は北九州市においてaacaシンポジウムを開催いたします。

テーマ：「開発と保全」
歴史と環境を生かしたまちづくり
レトロ都市門司の事例

パネリスト：黒川紀章　建築家
村松貞次郎　歴史、明治村館長
宮本忠長　建築家
出口　隆　北九州市助役

司　　会：内井昭蔵　建築家
(日本建築美術工芸協会副会長)

日　　時：平成8年10月31日(木)午後1時~5時

場　　所：北九州国際会議場メインホール

註：会員の参加御案内等については、追って協会、「事務局だより」で詳細をお知らせ申し上げます。

通りの電線も地中化され、建設当時の美しい姿を見せる旧大阪商船

主　旨

北九州地域は、わが国近代化の歴史の中でもっとも重要な位置を占めてきた場所といえます。とりわけ八幡製鉄は、わが国の基幹産業を担い、高炉を中心とした製鉄所工場群、巨大な煙突などの偉容は近代産業の象徴としていまだに私達の心に強く焼き付いています。又、北九州の諸都市は港湾、鉄道など交通流通システムと一体となり、国内はもとより世界に向けて開かれ、それぞれの都市は独自な発展をしてきました。

しかしながら戦後へ間もなく起こった産業、経済の構造変化はこれまで日本を支えてきた北九州の基盤を揺るがし、都市の風景も次第に変わってきたのであります。

門司は北九州の玄関口として栄えてきたまちでありますが、時代の変遷とともに以前のような活力がみられなくなってきました。そこで門司では昔の面影を残す歴史的建造物を修復・復元・再生などの手法を用い、懐古イメージを中心とした新しいまちづくりをして、再びまちをよみがえらせようとしたのであります。

「まち」づくりで常に当面するのは開発と保全という矛盾する要素を如何に調和させていくかということであります。歴史と伝統を守り環境を保全することは当然でありますが、そこに住む人々の生活を重視することも大切なことと思います。私達が常に直面している「開発と保全」という問題を懐古的イメージ（レトロ）でよみがえった北九州市を事例にとり、考えてみたいと思います。

改築が終わった旧門司税関

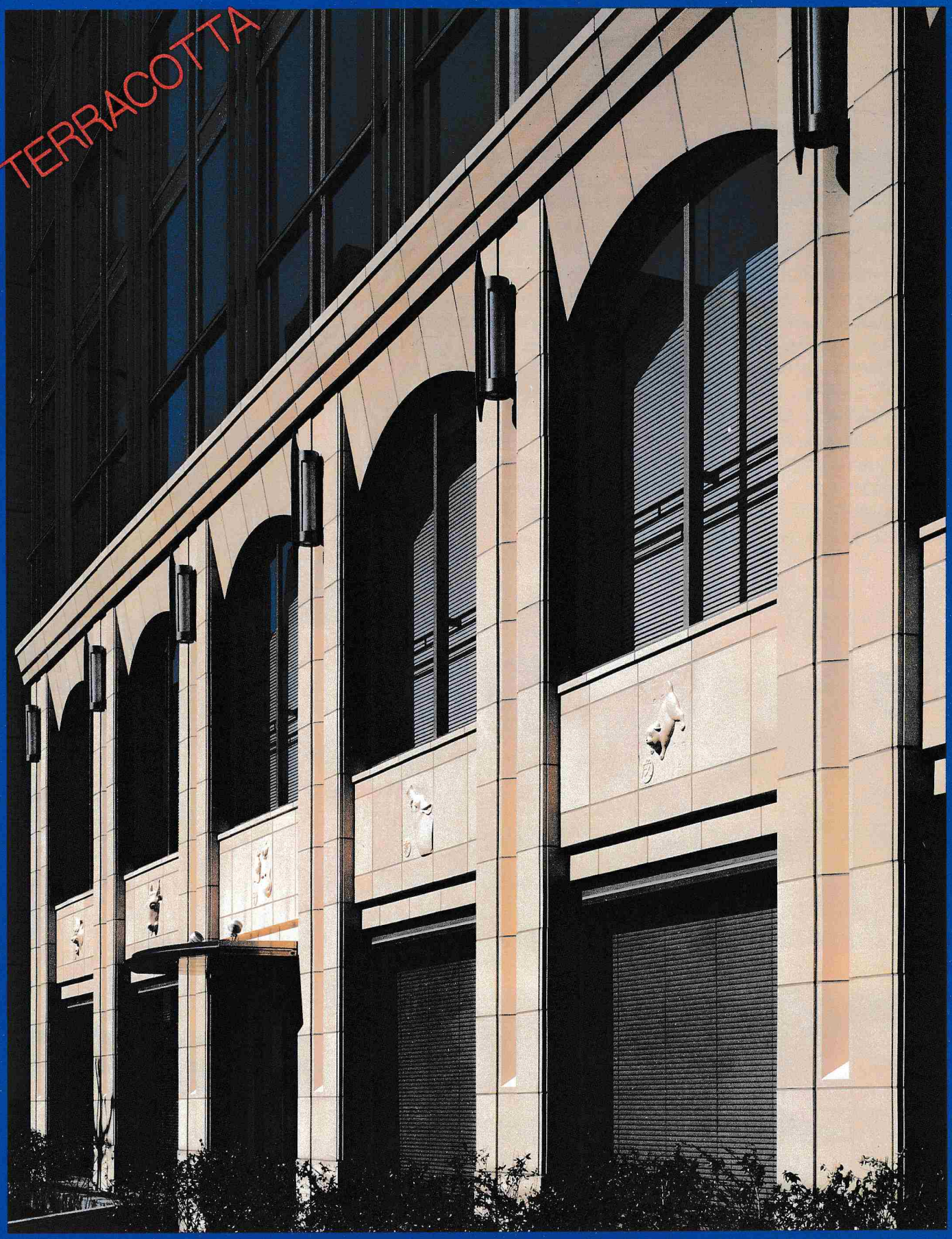
門司港駅前に移築された旧門司三井倶楽部　正面門柱も建設当時のもの

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会　広報委員会
広報担当理事 柳澤孝彦、
玉見 満（委員長）、高部多恵子、坂上みつ子
冨田俊男、北村孝昭、石田眞人、
渡部毅志

制作協力：(株)SP建材エージェンシー



築地えとビル　設計・施工／大林組

大塚オーミ陶業株式会社

東京支店／東京都千代田区神田司町2丁目6番地(平沼ビル)　〒101　☎03-5295-3555代表
大阪支店／大阪市中央区大手通3丁目2番21号　〒540　☎ 06-943-6695代表

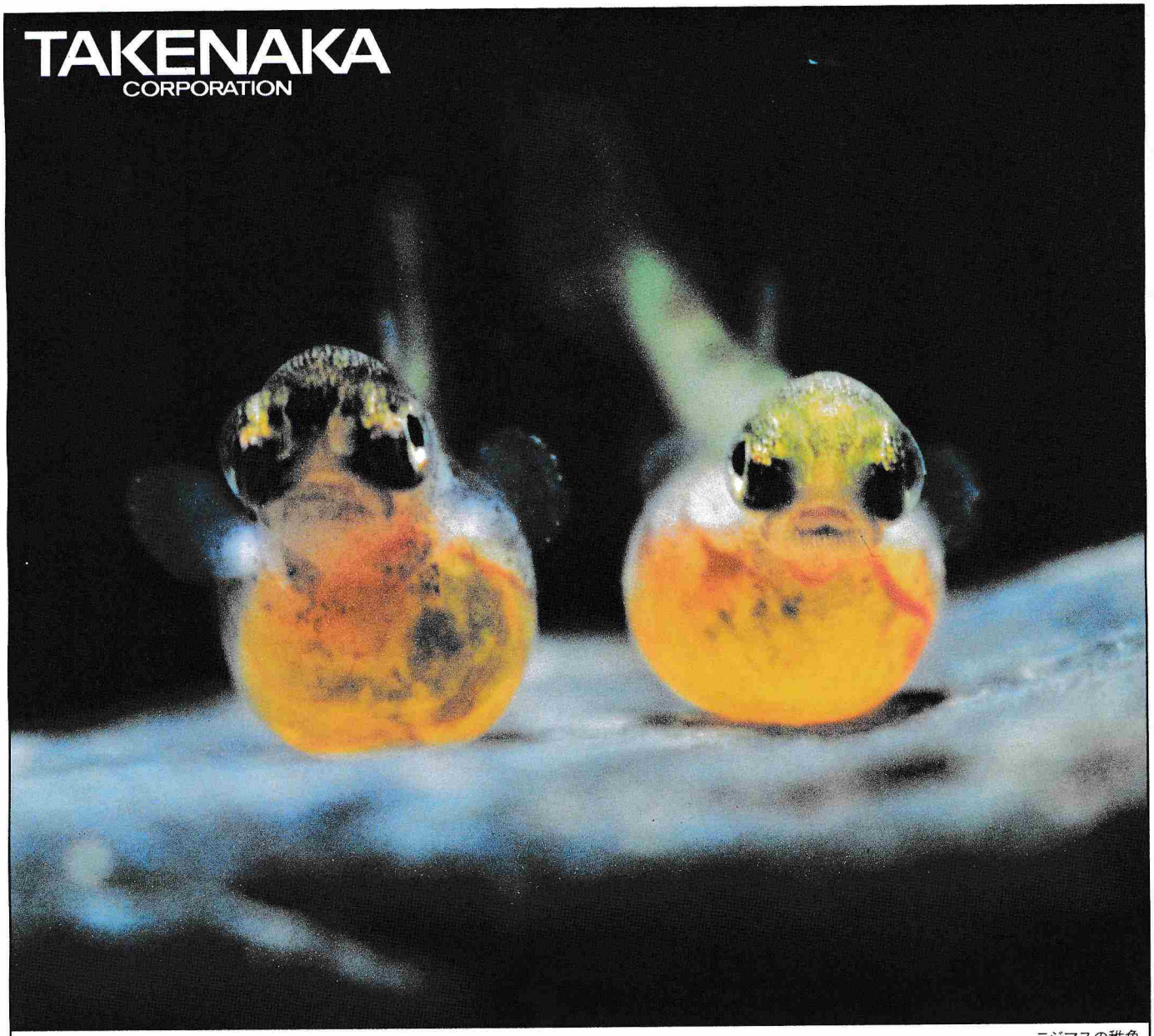
METAL ARCHITECT
KIKUKAWA

■ 東京都現代美術館
品　名：天井・サンスクリーン・柱カバー
材　質：アルミ
仕　上：合金発色

設　計：柳澤孝彦十ＴＡＫ建築・都市計画研究所
施　工：竹中・村本・浅沼・大木・森本・三平・巴組建設共同企業体

菊川工業株式会社　本社　〒130 東京都墨田区菊川2-18-10 TEL03-3634-3231(代表)

TAKENAKA
CORPORATION



ニジマスの稚魚

地球と、育つ。

地球環境の再構築は、すでに切迫した課題です。地球が保有する資産を大切に活用しながら、新たな資産を発見・創出していかなければなりません。そのためには、私たち人間はあらゆる生物たちと対話し、その力を借りながら、共に成長していくことが大切です。竹中工務店は、早くから独自の「地球環境憲章」を制定し、地球環境の再構築をめざす新技術を育成してきました。その成果をふまえ、いま、技術のさらなる高度化を積極的に推進しています。

創業1610年
竹中工務店

お問い合わせは ―― 総本店広報へ
〒541 大阪市中央区本町4丁目1-13 Tel.06(252)1201
〒104 東京都中央区銀座8丁目21-1 Tel.03(3542)7100
[WWW Home page]http://www.takenaka.co.jp/